古今談

繁野話

壹

特
へ 13
1.641

特へ13
1641

古今奇談後編

怪話

浪華書林　稱觥堂
揚芳堂

近頃の者三十年前の國字小説を數十編を戲作して系語の代也。千里宿より手紙を統て。
夷者紙九種を搨て書林に授こゝは。世
ゝ早なりの。其ゝの
あゝず。市小説を。山ゝ樓みゝトを賣り。家我
蓄き。書淫ゝ迷ふゝ
浪華ゝ遇る。書林
おむ。り去點ゝて譯ふ其幸あり。今ゝ
ゝて。ゝ家ゝ寄ゝ
中ゝり。冊ゝをとり羅。魚を拂ひ與ゝ

として。を様基を恐れ。同僚を恥て。沈黙する
而ものの。その中を奪へるがゆへ。一家の中に新
一家を新る。其首なる中のたちの作品。是
をこそ一方まん屋の賊や号屋ぞ。守屋
乃連れ言の葉に意ふく。硯乃理り
よく廣きより。東弓の故事一万位代の
作奇を整て。新逸士人を通すことを
覚て。白業乃巻い品精柄嶺の嘉題を
優り。古ドの前数ふ国ふるを従さ女数
の名實室ひんとをたゞまし。唐和の

彌を裂散の恐き喜を思し。生月に月偶言
に雷まん表を断る。江の姫
孫を杜十郎を新して。作品乃偏性をか
なり。弟の戒と作を為。字佐美
陳宮の義異い軍機の巧失顕らく。
紀の孫ざる皆把語天中。彼是九極。俳
長徒ありといへども。早従陸深名匠山川。古
老の作吟。土人乃口碑。此ほ恵んで世を守
まぐれを。是ゞ演義して。長き日の無ほ
倫ふ亀し。実や学の為より出る寿なく

ずと云ふ事なるべし。彼もつくづくと暗き月の如くなる魚の心よりて。義商の枝葉ふげ
ふ事なるべし。此者の如く法を立て、自ら誹り先づ自ら
らんうし。業子里沢子の評あ
きば、其ひとりこび接せられを可して。一
法を撰する事。己が分ざるの業なるべ。
吹れて酒の色十千閣主人撰

太三 逸 吾 民

古今奇談繁野話目録

第一篇

近路行者著
子里沢子正

雲魂雨情を告て太平紙誉ふ話
第二篇候
寺屋左孫生成草葬を引話

第三篇
紀の関守が霊弓一旦白鳥と化する話
第四篇
中津川入道山伏塚を築しむる話
第五篇
白菓の方猿掛の岸に怪骨を射る話
第六篇
素卿宿人二児と唐紅を携る話
第七篇
重月三郎菓舎龍窟に沈む話
第八篇
江口の遊女薄情怨恨て珠玉を流る話
第九篇
宇佐美三津之遊紅を飾て歌を乗る話

以上九篇

古今奇談繁野話第一巻

一 雲竜雲情を語て久しきを誓ふ話

雲を體とし水を心とす。平生消しがたく情この心世塵と忘れ桑門の身中只悪をなくして仏道はしきい祖師の法蹟飛鉢の遺地訪しあるて精進の助もなさんとひとろ沙門の平生経ちて和尚の法話を聞て雲の如く永の物乃春の行や霞と共に出て秋風と吹る期しらず。所路はあらゆる傍くを眺望して富士の麓に過うながら所ろ〻日は登陟の志中途ざりしが。平絶める所は物もとひやりて西くもかろ。往ける路の暁皆は空ぬと雲の容のと見ふ新しく所て深て胡多の雲と花沽を生ずるタ方の雲のあ〻たゆくしも。ふは去るけさ此寺の傍伯と称音ありて數日の号を休め一夜此寺の深層の五層よりなる。仏像の上に坐を設ハ恐とかれ所ふ。人の除むだき

為の樓窓ならぬ隱べき為の據にてぞと。秋涼の夜を讀誦しけるに
かすかなるなれば世とはなれたる心地し。雲路近きてくるがごとく人の心
およけやなれぬるし。上弦の月中天にかゝる程雨氣くもりて星も朧
なり。秋月ふそこえてなくらんまなかに月のをむかん高津の宮さへさ
だかならざれば。大に興を揚び眠を覺し。塔の頂に攀のぼりて。はるかや弥遠に
陽の命を亡ちてより四方に從ひてくるひに遠く望むだかりて。南
よりは直ぐに紀の雲路稀にゆるの雲路へ寄りて絶がちなり。かさぞ
北よりは海邊に往て。菊に出まれば海気に消され紀東耐まれ南へも
太旋た旋の風に吹かざられば雲水の固あるによつて衆雲と共に
一片でゐて天に停をとゆる。世の中に雲なく。嵐ありても蓋
へざりしに落雲村雲と吹ちくまくれ。今るものとござれしに。我を丹波
太郎と名は少に立寄院中にもかさみてくえぬるが。見人に看て。叔生の樓

臺を繼さて。變化定まりなき人乾達馬城をもたらんて蜃樓に濺ぜ
る。その底のみは居城あらんらして。たゞ高き風をよきとかしま。東西に結び
くといふんやん。又去夜のそらは天氣を常ある村雲。秋冬にもしま
經られ雲の。ぐつ吹ふ吹る谷なる山烟などの。近き風に吹まとされ
て北より西に。南より東へゆくるは。我同姓にありしば。我さぞそくは通に
遠く吹風さへ同じからざれ。それがしを奈良次郎とてくは。東に立つ般
若く奇峰の體をわかりして云へども。腰からそれ見へ太郎に及ぞ
ざるか。但ならびて立て。未我のかれてし我雲のもとぐさなるや。これまで
を泉の小次郎とよぶは。南の樓臺遠くして人聲あ雨よりもなくりてるろ
ゆへなり。又小海風に障ら指で立てて梯に。奇峰の形ぞ舞ひ獨生
なるゆへ。世の人泉の小次郎が妻を奈良次郎に奪まつると。獨情
の身よりしたとみべてかゝるもゆへあるやる。ご方は同じ。白峰姓なれども

遂に別れてかへるべきあるべしと魔郎がいとこ右衛門
次郎の次男にあぐ。元より素性名部なれば。後は六甲のたゝかひまで
ぶの首領なる魔郎多く部の山路にひそむ。東西なぐ蒙古も
横目人浪花の人目にたゝまじくちこんあるゆへ黒きとくてのたゝかひ。
返聖と薫せしまでも雲の色に今こそ我はまで。秋色のよづまもみづ
越を設し時にて。浪花人いでゝ。ろんと我ゆこいあくらよかろう。四
して小雲我ろうを碧とあんべ。我六甲の高きを侍ひて。車くあり
ちて彼を南海に出ちの。我は山に接てこどず。在間三郎出ることはま
にのぐら亜かれも雨師の小将なろう。ゆに進退は國雲にようてまれ
ども。我軍の時いづくも同じくて。四くは人世のあぐらおなろうんのう
わかり。且は雲水のうえもなぐさめのくあるのまくが。ゆて我一言で
まそもかうてやあてんまをもんん。寄もらんべ。ゆてもよるあんあい我寄

なろう我。徳竟禹より厚しとなん人の叢られをゆい出ろ付ゆ
かすき汗のちぐ我をちん。天の戸あきて朔に震は。黒をて我日の出の
所をかろなりゆづて我さしてう春に熱に仙て我山。
を出られるあるゆ。曉のちぐ我山のづくるみづくいて見来ほ。さんど
くれくいの人の目も松昌あるん。西小の嶺に衣きせて単くらんども紛
人の見我僅し。東小れ隈に涼く聚まべ雨と綾くん。ゆる六甲と我
まだ日和ろうんくん。海上に漁て上漁利を害を。或は少人東小左
めづて遠方のあに無し。攝の空に陸晴ゆ。夏の日小方の雲展ざれべ
東南の山に接て急雨を紛ゆ。凝のに陸ゆる林のあ川さとくゆ。ゆづて
衆生の心にあぐも。黒雲沢上に晴くくては拝紅の樽を回うゆ。ゆやゆ
のうんに三日霧へべ降ろも只情ゆくどゆ。林のうゆ中のほき秋こゆ。
ニゆ。風のまくゆ月に月の我べ月をもてなすとうんゆ。雨にもるゆて陸

まうさぐるは極悪人乃終焉に入て詩客の宿題歌人の擬作空しく腹中に枯しぬ。嘆なくべし。て月に亜の字を添しもうちて罪ふかくそ。

也。風に驅まて往来に惜絶はあるべき身の我に由ぐれば考らるき早風に吹の代恨憚いそぐらんと。人もそんこゝあ。行雲ようも月の行やうなるもうさに雲の集る事を霑とて。日のもとふ赤き雲を霞といふ。俗に混じて分別なし。又我素姓は地黄氏の新族にて。月にそそんに称地とこそ人とう我ちる所かるる代世の諸人は大空の一属のやうに思るまじ。其系圖大に遠ひて。大空氏は其徳を学ひて久しく蒼天昊天昊天上天と四季の名かまどもみどりの色かまこと。其飛深くして浪まをたせず。我らは至地とう八丁と量らはそも。所定めぬ世なれば。くるる所に人ちゝど風は形なくとも吹行て吹うとて。我は一日の間ふ清息定まらずば一向日のたそぬきに照て日本晴とやらんいふ時は一黨を

な潮の代を浮て去若界に去ぬ。古人の雲を賦しなる様に。その日は雲をなし。夏の日は暑代かんとて。露ぐりも我にあげかれ如代。我造物乃世の助ともなるは雨而已なり。是も其土地雨を主趣どる所にてゝざれば行てあさぐれ。或は他方の面のふ行雲をそそ方の天を代ト人は雲情代取遠ること多し。時あるて水とゆふ塔海潮水の分らるけまとも。塔氣を生ては我雲中の秘事なり。乳水泛て起る眞龍即ち風雲の表属なれば。雲なれみる面と奇水と名づく。多く是遠方の龍雨なり。又春の霑氣乃空に溢さふ夏に向て溶け降る。そは侍望てさぐ代雲となりてぬん雲蓊蓊しきといんせんゆるやうるる所は紫のごく徳のごくゆるの距のめくさめりくるあり。只垂下の人は見なるし雲とゝなれども。遠き空を横ぎりて行ふ人は一法く其脚をあるゝ。代は風みゆ。ども。現に消人聚る数

扨これハ陰陽の布にして。風の有無の界にある時ハ吹のことなれども広く
一疋の練とし。又織姫のこそ廣く水なさの文となす時ハ。風の中にこそれ
なるとよなり。霞をあけ雲紙ちらして。山のさかさ紙篋中によせし
むる。左に旋て綾の臼ひくかごとくなるは天氣の左なり。あやさの雲少く
紗あやさの雲あをを捲は。風まきんとして甚あれどもめぐるなり。上なの雲
東に紗下なる雲西にむかふは。風上下にめぐり聊雨氣の動くなり。空
より吹おろす風は其地勢によつて吹もどる事あり。浪紀の朝ハおなぜ
谷風吹て出船を送り。晩に秦風に帆をのぼせ。天紀の大津に
湊の攝地なり。風の勢ハ四方の山形に國が異土地に随て異なり。
唐土の書に名称多しといへども方角と四時に合せされども邦に用
がし。東南の風を黄雀風といふも時六月にあらざれば用ひへからざる
がめし。本綱家の俗称多かれども正しからず。著より花の風とある

とりハ山風吹ども及ぶなし。水氣さぞも吹くるまゝの風ともいふよ。
小國来風とや吹あその横ぎる遠く来りてもはよし。真風を西
南の山なき向より。海も吹なくされ真一字に吹返す其ときが清らに
涼し。風雲の紗ハ四方とりし真正なれば。斜からに隈りて吹ゆく正風
は帰なり。四方より吹風は颶風と名付。吹られハ雲の心さんおぶや
かならず。冥や雲雨風煙ハ西ももとれど。風ハそもむしろ雲れ形
勢をさだんとて絹に白粉を落して。得そ吹ちるまゝに形となれ
を吹雲と名付。細にきてんと歌せば羅章の傳と心に合こそ
西の雲れ登蹄とせると八雲翁より人世に傳へるよし。我ながら
とはなる雲よ人そのかしこなる。今更そ来来の雲を吐て
山にかゝる雲なし。白しせの後つゝきを来長に時紙のごとく。祥雲
氣ふくれたる門立て福利海に満ち人丈林をなし。限なき東風恵

ふる。我らぞ化浮雲も端神をひるがへし。第二四方之立そをひてたへど奇峰出し。静なる世の觀とそる人顧時をこらすことみうまと寿のり化膨こゝて四方みるまを去まとる。沙門是さわてを人之雲水のまゝ我を拂ふ。めゝで此ゝ拂なる服形の荘厳なるべし。弥しくも雲魂の詮を国て人るもかう問て心漢の四方之蓮る雲の背ふう各其名あること物て紛まれもあまと愛めふ白雲と遊び。空なる妄言聽人も妄聽去むるん。惡ゝも角ゝも去をそなる

(二) 守屋の怪殘生を草莽ゝ引話

敏達天皇の御代疫疾大ゝ流行し。蒼生を害そるこゝ少なのべし。此時拙部の守屋の臣。大連の職ゝ在て諫紛まと言醜と。天ゝ咸名あり。因く言を進めて曰。凡善教の世界ゝ紛ふ。やい国の善政へ其国ゝ仕き。彼此の君教心国ゝ多ゝ。貨を交易をるゞ。互ふれ用いて恥なしゝ。

地を易ていゝ行るべき事あり。紛まざる風あり。我国上古ふう宜ゝ敬れ和楽あるゝ。新羅百濟王化ゝ帰ゝてふる。漢土の徳楽書に伝人ゝ伝りて。堯舜紛ひれる述ふの名其備を明ゝ。紛ゝ礼楽ハ世代み ふう慶ぜざるこをゐど。文武周公後生ぞゝも時宜ゝ従ふ。紛や中国風土習俗の異多ゝ差ひ用ゞ。近ゝ美仏国の教伝来して敬信そるみ ゝ。其国遥ゝ隔て西夷ゝあり。其土風の名政をそゞ。先羽みありて中臣の鎌子。愚ゝ又る尾輿等。疫疾の事ゝ為て奏して云ふ。本朝えふ百八十れ社稷の神あり。て祭るれ。こゝ天下平かう。何ぞ人こゝ。て夷神を用むゝ。彼仏い夷狄のゝ施をゐゝ。世法ゝ驗な。其の異ゝ。叔滅をたゝ。生成を枝ぐ。漢土の上古ハ君臣皆長寿ゝて百歳ゝ。ず。仏ゝ其地ゝ入て夷代むも伝る。漢土ゝ仏入ざるの前ハ詩書雅頌の音あゝて万民自ら多福かう。我日本ゝ儒教ゝ。

い人の量浅く寿の短き長うし。今夷國の神を信じ本國の神を背
んじもよゆ國神怒りて疫疾と祟をなすと。朝廷之に従ひ教言。
対の弊を救ふの激論なりといへども。今日其言を用ひ仏をもうでる國
津神に謝しむ。ゆ民安きにむかひ宸襟楽しめるべしとぞ。
時に馬子大臣。蘇我と豊日王の長子厩戸王子。幼年なれども聰明
人に秀でるを。ともに守屋に對て云。大連の言而も義用ゐるべしと
のべど。ともかくも仏は夷狄の法用ゐべからずといまだ決く考へざる
に似たり。我邦上古西より遷て東し。神武皇西鄙より起て宇内を併せ。
漢土舜王なるの諸馮に生れ東夷の人。文王は岐周西戎の人なるに
ども。皆聖徳仁政土に後世に垂てり。仏は浄飯國王の子。其國漢土に遠う。
漢土と我邦とは小なりに南なりに世界の中國にあり。大に新なれば合
別をべかるべし。已に漢帝よりおのそれ用ひらるるにあり。仏教もなほ用ひ
民を利するべきなるなり。況仏は夷狄なるなんやん。況仏法を
の其教み達せざるの所は其夷とするにあらざる。仏は其富貴を捨道の
乃ち身をもそれ。患飢寒を免まんがためのみ。仏の国ふるうて
空妄不実の事紙記んし。世のれ夫不実のるをもせば。年月を経ても
て衆人悪て足を棄ず。識の賢者其妄をおざんや。其乃妄なるべき教
何で漢土我國の今日のごとくなるや。天神鬼神仏法倶にいまさんや。妄な
まで。仏の妄へ證をべきなるしるしあへ不色の論ありて愚者のこ
を而。其人ものを虚実れ體をもんや。世の人我よ実なる法情の意あるへ
大智にあるべしとのたまへり。其憎愛をもて取捨せば。後世必ずしも相排
斥して勢二つかれ立どもとも。仏家は儒生を恵人とし。儒生は
俗家と女人とし。俗家人を品せば儒生を卷べし。儒生史を記さば
俗人を列ど互に温柔の和を失うん。仏教べて命教を侵といへども

忌諱の説にて己が書の無逸に言ぞや。時より厥後亦克壽きこと有てとなり。武八十年武八七八年武五六年こゝに文あり。彼時は漢土にまだ佛の名を聞ざるのみにて後に。佛徒の中に壽ることのあるを。漢土に佛語入りて後は言語集雜めて頌論變ずるてしもあるべし。其國に通ずるの音後に語雜ることの自然にて免ざる所なり。佛語入りて万民福なりとしては後なるのみをもて佛の名を聞ざるの早く明るの花は早く謝し。栄をなしなるゞ必衰なるしみ。践祿多くして血脉續ぬあれば眷屬に富て養ふに足ぬあり。煙を多つ家多きは身ふけくをとゝあさいなるの後なり。世人足しを知ざる徒び貧に居たり。武帝の夢にあらざるの利益ぬあるゝとゝなるを。王者の民は森の如くにして惠のうらに生活を。佛のみなる所其域に近かりん。大連熟再思と加へ給へ。今漢土聖

教既に来ること久し。之儒の徒に親切なるゝ成情む。九まる直に漢土に使を遣し。西接に百濟を利せんとなりて之に
やはど。大連の高明なるに為りとなり。大連ずに温和なく從
容に答て聰明の論じまに所世の惑を明に解らぶ佛陀に離に
つて詳に論ずるに及ぶ。良ず異国見に以廣まる文華を以て煙
朴の國風を失ふて武ずるの。王子太子より文を明に
繰に多言に及ぶとなり。帝元より佛を好まず守屋が一言を取べき
として佛教を停め佛像を流し。傍徒を禁ぜるに。疫病に
くさんかんべ佛を流をの崇に。くゝ恐るゝ人多ゝ豊日王嗣て
立是用明帝なり。既に皇子時を為て威名あり。守屋のたゞ權
勢稍後に。用明崩じて守屋は所業穴穂部皇子を位に
と計る。穴穂部皇子威勢を恃んで怒まず。物部氏を殯宮見

として七さびにはゆぴゆへと衆を属せんで馬を逐て門命を含で
宛様と害し。諸皇子と称して守屋が河内の家を圍む。守屋奮
厲家人と卒て稲城を築て戦ひ。三廻敵軍を却還しむ。廐戸王子後
軍とあひて戦を力む。守屋の軍此と利あらず。族従者悉く奥のゐふ死。
其身も矢に中て退て伏動自在なるべ。合軍に告て速に進ませて身を
脱るべし。我いまこの命をとどめんとおもふ。家の子漆部の巨坂臣守屋が
服を場て死に代らんとをひ。弟小坂を人を諫て肩わむ。守屋熱
軍と同じく皇衣に服を換へ駿猛なるあ伊ゐて城を離れ廣
瀬の内にいたりて足をとゞめ。守屋主従只五人。
昼は葦原にかくれ伏し。夜は月を仰て伊勢路をめぐりて淀海に入
る。我家地に身をかくして在る邑の長にたよりて彼が宅の後な
る山乃岩窟ふひそみかくれ。創を養ひ命きえとゞまりて代の移

る紀さ後ともをんと命を存へ。ひそ山れ憐みて人れ通ひ来る
路もなく。秋のこはそぐるゆに庵にむとびて高名を草葉に
埋む。世人是を紀のなり。是で張中れ張者。自ら狂生為と称し此
所に老矣を朝とい。つしらあるを拒古帝にしらりて。廐戸皇子嗣の
たるとして政を摂ひ。仏法時代を興して厚く大利を建立し。位を
成就と。仕を唐に学し。隋唐の式に従て冠服を制し位階を定め。禮を
肇め楽を正し。國に疾疫なく五穀豊熟し。海内の治安永代に新ら。
小坂の里に出て世の動作を学て。ゆ治る。守屋が宅をやはびい焼に
びい在で云。廐戸政を関て君安く民和楽せば我に為なかめて他議に。
你出て遠く新にいたり民間に立交実に民人の澤を被ふ。仏教を
て國安きを。願ふて我に学せよ。て小坂憔悴せる形に弊垢づく
衣とはけを会して大れれ初に往とに里遠くしていたるに飢ぐらる

に宮城に招き入れ片岡なるものを召やしかうそなるけれは興孝ふ
たて經營をつくるなるを方々に繳紙して示とおりぐんぜは不法をして哀と
ふのひ。たたく顧て彼ふ衣食式場へべしと命じ。從る窮人飢人の
傍に来てはてを。飢人上の恵とも。掠奪す衣食式場へ既に村の
出て命じり。今多べしとて。飢人張て記生して云孫者飢て目力
賀と拓よりたて。ぬまで拔あるの食式をつずしてけつ仕かうず。
今得ぐ。さは恵なれば。大公目前一人の飢窮ををて衣食式場へ。
天下の飢人いくぐくありとも。ぐ。ぐくをて衣食を給ふ式得べ
きや。足近きに親しく遠き疎く。公平と欠もあるとや。窮人不真
して言へどもるいち多りて其標をしに本ふ奇特のことにおそて
陣内をトしもりて。飢人共け。其ふる式先ふるい人情の常く。
況や執政一人のふい億万人のふ人なるをや。我ふ近き飢人と恵む心

なるべ。遠き國の民ふ其ふなるらんや。飢人地ふ招して異を伏をを。
る宮ふ殺せもひて。実や此飢人れたのふあるべ。ぶを飢ふ
繋まんて傷べしとあふ哀ど

死なるや片岡山に飢て死せる其人哀をや成し

人をそをめもふ。邑長をそて衣食式あふ人て飢人せうと
まるるぶ。窮人をるの陣屋をのうて仁德を施を。飢人世ふ有
ざき祈ふて友人ふ對してかくとなりん

するや民の小はたんでふて我大君のみそるいとれど

使傷て此ふ啓をされでふて異人なりと。まわて人をふて飢人を
たるふて。使ふ的紙る衣と其地ふとめて其人い新もみ。ふるふも
小坂は出而の顕まんふ式恐と其不をのがうう。境をたどて道
遥ふ歩ををれたれば。ふ四の彩るゆふ立をて左れ傷ふ恢

を作らず。後なく死れ雑仕をる人者り。群るる奴人の数をかぞへて食をあらんぴ作る奴人とうそ衣をあらん。作逐よ起をんべ。とだべの具とはなさせん。公安ねくそて去る。流を丐ら面く相射し語てそ。彼れ日掃政王片岡みて飢人を恵るものて。諸有司ろくを空つて。大饗の粮を減じて。今日よりのる恵を沙法せ〳〵ろ〳〵者彼さよとのるる。小坂足ようを通て沈海よ陸ようを。彼て射して去るの仁恵とうるる。ろ和歌ねして云。掃政王仁い国を紀一恵を孔尚よ及べ。民永くを仏とうけん。我好びをまん加ろ〳〵れ〳〵。我今日国の会伐ろると其後い敵て世上のるを問ろぶ。後廐戸王薨ぜるとまて傷ら勝て止ど。ろを経ていい里民と付来し。彼よ教て水伐放ち土を穿き利益をるとを少のべ。皆人里よ出ようをむれども。山中老境よ廐ぜるとを。性と若ひ百歳の長寿を保ち。皇極の朝よもて廐戸の

所る山背王入鹿ざるに亡ぶ社其ハ嗣を絶てと実て強してこ。此人のるよしていんどひるるの。秋雲昇く数じ変変りるきふあ〳〵どやふ坂こひ社世の人是ざるふ記あり。去る須じめ墓地をる〳〵み。其ある旁の地脈を断て牧ざしあ〳〵せでと。ある孫て翻せ〳〵と志頼なるよ〳〵。義聴て笑て云。葬地の吉凶ようてる孫れ盛衰を論るハ堪恵れ法弊風水家れ説みて人を惑とと其害大なり。我国其事の行ばるとんて一つの赤ようんいるれば墓を築る身〳〵て。其墓を守るべきる孫の禍を死んや。是去る件を信じ世ふ功ありて其る孫續さると。伝法孫なり〳〵愚人の疑ん〳〵て伐怨ま。傍家心説を妄作流言して其るを掩んとるるあな〳〵ん。家運ハ大数の定る所。夏殷周のこ代も時あ〳〵て尽ぬ。鹿今勢とるるも豈久〳〵んやとい。果〳〵く祖なく馬ふこ代の墓葬。入鹿ようて孫迷ある〳〵。義世れ愛

易とえつく〜。時代遠ふ後まて。今の怪なるをそこなひて里人に告て云。我い先朝の大連和部守屋の臣。世代のゝれ此地に生れて今ハ此地に祭る。我を此地に祭らば。国に水旱の憂なく。安寧永久なること湖水の尽ざるごとく。なるべしと。遺託によりて逝去後小祠を建て萩原の神と祀なり。祭祀おこたらば。大連の一族なる巌窟も。今に依然として遺りつゝかゝり侍べるとぞ。

方正道人廐戸王守屋の臣と就水とる詩あり

雪裡栫條順克柔　石梁度人斷時休
臨史何取口碑實　紅白就分萩與萩